

六回会員交流会

「国宝迎賓館赤坂離宮」見学会

事業部 岩崎貞治

四月二五日、会員並びに紹介による参加者を含め、総勢二七名のご参加をいただき実施致しました。入館前に手荷物検査や撮影禁止、飲食禁止など厳しい注意事項を聞いてから入館しました。

正面玄関の高い丸天井や階段の壁などホール全体が乳白色に塗りこまれており、床面の市松模様の白い部分は、イタリヤ産大理石、黒い部分は宮城県産の玄昌石が使われている。周囲の壁にはランタン風照明、四隅の床に配置された灯台の淡い光が天井



や壁に描かれた絵柄をすずかに魅せてくれる。

玄関口から、階段に敷きつめられた真紅の絨毯を鮮やかに際立たせた大ホールまで続く。大ホールには、大理石の巨大円柱（高さ五・五メートル、周囲五〇センチ）がでんと構える。

続く朝日の間は、要人の表敬訪問や首脳会談が行われる間であり、国賓が天皇皇后両陛下とお別れの挨拶をする最も格式の高い部屋である。

採鸞の間は、賓客を最初に案内する控えの間であり、総理大臣が外国の元首との首脳会談や条約調印にも使われる。暖炉の上方に、金色に輝く鳥のレリーフは古代中国の想像上の鳥「鸞」で、国が平和で栄えている時に現れるといわれている。

花鳥の間は晩餐会が催される。木曾産シオジ材で板張りされ、ほかの部屋と異なり、全体が直線で構築され和風になっている。



茶褐色の壁に飾られた三〇枚の七宝焼きは花と戯れる鳥の声や花の匂いが漂ってくるようだ。

羽衣の間はオーケストラボックスを備え、壁には和洋の楽器のレリーフが施されて、歓迎式典や晩さん会の招待客に食前酒を振る舞う場として使われるほか、演奏会が行われることもある。赤坂離宮の中で、最も大きなシャンデリア三基を備えている。部屋も最大で、天井画は、天女が地上に舞い降りた後の空もようを表現しているという。シャンデリアの最重量は千百十三キロ、軽いものでも八百キロあるという。

絢爛豪華…大理石や家具調度品、絨毯カーテン、シャンデリア、どれも輸入された高級品である。賓客が自国の製品であることに気が付けばさらに、親日の心が増幅するだろう。

敗戦から目覚ましい復興をなし、世界第二位の経済大国の実力を世界に、誇示する価値ある建物であると思いました。

一時間半あまりの見学を終えて、近くの中華飯店で懇親会となりました。皆さんの

迎賓館赤坂離宮へ

和田 ヨシ子 三十六年 沖見小卒

東京へ来てから気づけば五十年以上。

私にとって「迎賓館赤坂離宮」とはテレビのニュースで観るだけの場所でした。赤坂には仕事で三十年ほど通っていました。まったく縁がなく、今回の企画で見学出来る事を初めて知り「どうしても行ってみよう」と思い、家族と友達五人で参加させていただきました。

最初に入って感激したのは、正面玄関の大ホール。テレビでよく観た、奥まで続く真紅の絨毯！まるで映画女優にでもなった気分です。レッドカーペットを歩いてみたい、と思ったのも束の間、残念ながら立ち入り禁止。ちよつとがっかり。

気を取り直して、晩餐会が催されるという「花鳥の間」へ。洋風なお部屋の中に四季の草花と鳥が描かれた七宝焼が三十枚ほど飾られており、和と洋の融合が素晴らしいです。

さらに私の心を惹きつけたのは「朝日の間」。迎賓館の中でも最も格式の高いお部屋で、朝日を背にした女神の絵が天井に描かれていることからその名が付いたそうです。六年ほど前に、天上画の修復やシャンデリア、カーテンなどすべての改修工事を終えたとのこと。とても驚いたのは、天井の金箔の貼り直しは、高い天井にも関わらず、脚立を使って一枚ずつ丁寧に貼り直しをされたというエピソード。

その他、館内の絵画、シャンデリア、鏡、カーテン、絨毯、装飾品、見るものすべてがこれまで目にした事が無いような豪華なものばかり。まるで違う世界に舞い込んだような、夢のような時間を過ごさせていただきました。貴重な体験をありがとうございました。

機会がありましたら夜間公開のライトアップした迎賓館を見たいです。

今回参加できなかった会員さんにも、次回は是非ご参加して頂きたいと思います。

